



が娘になる時

小島政二郎

中央公論社

妻が娘になる時

定価九八〇円

昭和四十五年一月二十日初版発行
昭和五十四年二月十五日三版発行

著者 小島政二郎

発行者 高梨 茂

印刷所 三陽社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話 五六一一五九二(代)

振替 東京二一三四番

©一九七〇 検印廃止

目次

妻が娘になる時

五

美籠と共に私はあるの

四一

魯山人誕生

七五

山崎富栄

一九一

あとがき

二五二

装幀 高松次郎

妻が娘になる時

妻が娘になる時

初おもて六句

私の若い頃は、市村座の全盛の時代で、若盛りの吉右衛門と菊五郎とが毎月のように面白い芝居を見せてくれていた。

菊五郎の相手役の女形おやまに尾上芙蓉ふじやう——後に菊次郎と改名した好すいたらしい女形がいた。

劇評家の三宅三郎が「実に情趣の豊かな役者だった」と言い、「セリフ廻しに少しネバル癖があったが、薄手で、キリツとした、小股こまたの切れ上った感じが濃く、自然、時代物よりも写実的系統の世話物がヨリよかった。時代物でも『鏡山かがみやま』の『尾上』の如き佳作も多くあった。技能ばかりでなく、女形の心得とも言うべきものをよく体得して、研究、用意も優れていた。彼が現在まで生きていたら、正ただしく女形の名人として賞讃されたに違ちがいない」

少ししゃくれ顔の、奇麗な女形だった。三宅三郎は「セリフ廻しに少しネバル癖はあったが」と言っているが、最ひい辰にはそのネバるところが情じやうがあつて好すいたらしかった。

折口信夫は「この頃は女形が大体美しくなった。併し美しいということは芸の上からは別問題で、昔風に言えば軽蔑されるべきものである」と言っている。そうして更に「最近故人になつた市川松萬など、生涯娘形で終るかと思われるくらい小柄で美しい女形であつた。だが松萬の美しさは、素人としての美しさに過ぎなかつたのである。こうした美しさは、鍛錬された芸によって光る美しさではなく、素の美しさで、役者としては寧ろ、恥じてよい美しさである」

この女形論はビックリするほど面白いので、もう少し拔萃すると、「立役・女形を通じて素顔の真に美しい人の出て来たのは、明治以後で、家橘・栄三郎のような美しい役者は今までなかつた、と市川新十郎が語っていたくらいである」

「一体に素顔のよくない女形が多かつた。(中略)今の市川男女蔵の養父で女寅から門之助になつた役者、これは出雲から出て上方芝居に入り、更に団十郎によつて相当な地位になつたが、これもみつともない役者で、どんな芸をしても美しくは見えなかつた。こんな連衆が立女形であつたので、鴈治郎附きの老女形で居た市川莚女などは顔の造作に異状はないが、まあ綺麗でない。それに体恰好も男性的であつた。雀右衛門になつて死んだもとの芝雀にしても、顔はよくなかつたが、役柄に融通が利き、美しく見える瞬間が多かつた」

人形振りの時など殊に——。彼は「本来が娘形であつたし、常の心がけから、美しく見えることがあつたのである。(中略)その他一般に女だか化け猫だかわからぬ汚い女形が多かつた」

「昔の美しさから謂えば、生地きじの美しさの見透かされるのではない。(中略)地と一処にその上に作りの美しさ、其以上に鍛錬によつての美しさが見えなければいけない。つまり芸が美しく

なれば、姿も美しく見えるといったようなものである。今の女形は概して美しいが、美しくない女形も立派に存在し得るものであることは、日本の歌舞妓の為に大きく言われてよいと思う。そういうことによって、見る方の見物も、見られる方の役者も、芸の上での張り合いが出来る訣だ」

またしても、私の悪い抜萃癖が始まったと思われるかも知れないが、事實はそうではないのだ。私のいつもの老婆心、女形の本態を、この際理解して置いて頂きたいと思ったばかりである。この小説の狙いとは何の関係もないことなのだけれど――

要するに、尾上菊次郎は素顔は決して美しくなかったが、舞台顔は色気があって美しく、ピツタリと体をくっつけて来るようなよさがあった。「白石噺」の宮城野、「すし屋」のお里、「御所ノ五郎藏」の傾城、「十六夜清心」の十六夜、「河内山」の三千歳など、今でも忘れられない。

六代目菊五郎が、

「女は、手を握り合った時、ヒンヤリ冷たい指をした女でないと、情が移らない」

何かの時に、不断いつもそう言っていた。これは、私なども、同感だ。手の暖かい女には、不思議に情が移らない。ところが、真夏の或る時舞台でそういう場面の時、六代目が何気なく菊次郎の手を握ったら、ヒンヤリと冷たく、思わずひしと握り締めずにはいられなかった。

これが六代目が菊次郎に惚れ込んだ最初だった。菊次郎はその時舞台に出るまで、楽屋で氷に手を当てて冷やしていたのだそうだ。

彼はそういう情のある女形だった。それが見物の心にも通ったのだろう。久保田万太郎は、こ

の菊次郎が好きで、私はまだ新進作家にもなれない文学青年の頃、万太郎は新進作家として最初の短篇集「浅草」が出版されて肩で風を切っていた頃。

或る日、偶然市村座でこの先輩の姿を見掛けたので、挨拶に行った。忘れもしない、三千歳の幕が切れた時で、三宅周太郎と三人、飯を食いながら今見た舞台の批評をし合った。

三宅は、菊五郎の直侍^{なみざむらい}が、身の危険を感じて三千歳との逢う瀬^おを振り捨てて、大口屋^{おおくちや}の寮^{りよう}を飛び出して花道をバタバタと音を立てて逃げて行く、その逃げて行き方が気に入らず、あれは現在の不良青年の逃げ方だ、歌舞伎の逃げ方ではない。そう言って、もっと非写實的に、羽左衛門流に七三^{しちさん}で低く身を沈めながら、片裾^{かたすそ}をユックリ捲^{まく}って、舞台を振り返り気味にリズムに乗って、バタバタなどと音を立てず、絵になった姿で引ッ込むべきだと主張して、それらしく自身で型を付けてやって見せた。

「三宅君、そりゃ無理な注文だよ、今写実に凝っている六代目に対しては——。だから、徹底的に写真主義で行きたければ、在来の歌舞伎の脚本なんか使わずに、新作で勝負すべきだ」

アナクロニズムを構わず言えば、宇野信夫の新作「巷談宵宮雨^{こうだんみやめ}」で六代目の写真主義は見事な成功を収めているし、三宅も苦情を言わなかった。

そんな話から、菊次郎の話になり、三人ともいい女形だと口を揃えて褒めたあとで、万太郎が突然、

「私に今お嫁さんの話があるんだが、どこかに菊次郎のような娘さんはいないかね」と言い出した。

「そんなにお好きなんですか菊次郎が——」

万太郎が後輩に自分の好みを打ち明けるなんてないことだったので、私は特に親しみを持たれたのかと思って喜んだ。

しかし、突然菊次郎のような娘はいないかねと聞かれても、とっさに思い付くことは出来なかった。第一、もしそんな娘がいたら、万太郎に世話をする前に私が自分のお嫁さんにもらわずに置かなかったらう。

そう言えば思い出すが、万太郎が初めて「プロローグ」という戯曲を書いて懸賞に応募した時には、千野菊次郎というペンネームを使っていた。

ところで当の尾上菊次郎だが、そんな訳で大変人気が出て、押しも押されぬ立派な立女形に出世したが、肺でも悪かったのだろうか、大正八年に三十七歳の若さで突然この世を去った。それ以来、菊五郎はいい女房に恵まれず、一生大きな損をした。

万太郎が売り出すと同じ頃に、親友の大場白水郎が株式仲買店の店員になって、ウリ・カイで遊びの金が自由になるようになった。その頃の相場師は、一軒の主にならなくても、当てれば毎晩のようにうまい物を食べに行き、花柳界へ遊びに行ける程ウワの金が自由になったものだ。

白水郎も、万太郎も、二十五六歳の遊びたい盛りだったから、浅草の料理屋や待合へ出入りするものが面白くなってたまらなかった。同じ年頃の谷崎潤一郎も、「幹彦君も私も飲みたい遊びたい盛りの時代で」「東京にいても、夕方になると、ソワソワして無上に茶屋酒が恋しくなるという年頃」だったと書いている。

遊ぶようになってから、万太郎の取材方面が急に変って、「お米と十吉」などという、花柳界を舞台にした小説が多くなつた。赤木桁平に「遊蕩文学撲滅論」という威勢のいい評論があるが、その中に小山内薫や近松秋江、長田幹彦、吉井勇、後藤末雄などと一緒に、万太郎の名前も挙げられている。

そうこうしている間に、梅香という奇麗な芸者に彼は心を引かれ始めた。

ところが、万太郎も、私も、不幸にして女に持てたことがない。気が弱くって、よく気が付いて、そのくらいだから男らしいところが少しもなかったせいだろう。男が、女らしい女に心を引かれるように、女も、男らしい男に心を引かれるのは当り前だろう。

いつぞや羽左衛門が新橋演舞場の二階に、誰だかの踊を見物に来てゐるのにぶつかつたことがあつた。彼自身芸者を大勢連れて来たのか、それとも、

「あら、橘屋の兄さんが来ているわ」

というので、芸者の方から集まつて来たのか知らないが、とにかく彼の周囲は賑かだつた。

目の醒めるような女に取り巻かれた中の彼の動作、口の利き方、物の食べ方の潤達さは羨ましいばかりだつた。例えば、あたり憚らずバリバリ音を立てて塩煎餅を食べているとか――。どう見ても、男であり、雄であつた。

万太郎にしても、私にしても、女には親切なのだが、悲しいかな、そういう雄のエレメント、いや、雄の魅力がなかった。雄のエレメントのない親切なんか、女にとっては一文の値打ちもなかった。

「将棋観戦記」の倉島竹二郎が、私の恋愛を評して、

「先生のは得恋とくけんではない。無理落おとしだ」

と言った。

「無理落し？」

「先生の力を借りなければ、離婚出来ないし、離婚後の生活も保障してもらえないし、先生の恋愛を受け入れるより外に仕方がないと言った感じですよ」

「そうかな」

「みつ子さんの場合でも、清子さんの場合でも、そう言った感じだな。惚れてはいなかったな」

「……」

そう言われれば、私には一言もなかった。万太郎の場合もそうだったような気がする。

ところが、白水郎となると違う。白水郎は俳句の作者としては相当の地位を与えられていたが、万太郎の俳句に比べれば、二流の作家であつたろう。話をして、万太郎の方が上であつたし、面白くもあつた。が、そんな才能の優劣なんか、女にとっては問題ではなかった。白水郎はよく持てた。万太郎とは比較にならないくらいよく持てた。

芳町でも持てたし、浅草でも持てた。新橋にも一流の芸者にいろがあつた。その恋のイキサツを白水郎自身書いているが、相手が余りに有名な人の奥さんなので、ハッキリここに名をあかすことが出来ないが、言えばエツとビックリするような或る夫人にも惚れられた。結婚した相手とも、一ト方ならぬロマンスがあつた。

万太郎は梅香に惚れても、心の丈を直接彼女に打ち明ける勇氣がなかった。で、彼女の代りに白水郎に向って胸のうちを打ち明けて、斡旋を頼んだ。女はこういう態度にも、雄を感じなかったに違いない。

ところが、もっと悪いことに、梅香と白水郎とは人知れず出来ていた。返事に困った梅香は、「折角ですけど、私には現在義理のある旦那があつて、今急にどうこうという訳に行かないんです」

そう言つて断つて来た。万太郎の希望は、嫁に来てくれというのだった。花柳界の女にとつて、嫁に来てくれという申し出くらい魅力のあるものはなかった。大抵の女が一も二もなくグニヤツとなる万能膏だった。

ところが、その頃は今と違って、経済的に小説家に信用がなかった。どうせ芸者に売られるくらいだから、彼女は金銭的に苦労して来ている。小説家の女房になることなんか真ッ平だった。事実、梅香には下谷に有福な旦那がいたのだ。その人のお陰で、谷の家という芸者屋を切り廻していた。打算に長けた彼女は、座敷が陰気なせいで、余り売れない実の妹のことを、万太郎の話を聞かされた時思い出した。

「ねえ、先生、私の代りにお京を久保田さんにどうでしょう」

そう言われても、白水郎にはすぐには返事が出来なかった。と言うのは、梅香とお京との美醜が日向と日陰ほど違い過ぎていたからだつた。

二人は姉妹とは思えないくらい似ていなかった。大一座の中でも、梅香はすぐ人目についたが、